

Copyright © 2025 by Mizuhito Kanehara

翻訳ワークショップ

PRINTED IN JAPAN

まえがき

書庫代わりに借りている老朽アパートを片づけていたら、2007年の「ダ・ヴィンチ」が出てきました。雑誌はほとんど読み終わったら捨てるのに、なんで？ と思って、目次をみたら、佐野洋子の『100万回生きたねこ』出版30周年記念の特集に寄稿していたからでした。久しぶりに読み返してみたら、翻訳がらみの話だったので、ご紹介します。

この絵本の英語版のタイトルは *The Cat That Lived a Million Times* らしい。まだ読んだことはないんだけど、翻訳はむつかしそうだと思う。だいたい、「おれは、100万回もしんだんだぜ」が大変そうだ。なにがいちばん大変かというと「だぜ」だ。なにしろ、どんな和英辞典を引いても、「だぜ」なんて項目はない。この1文を英語に訳すとすれば、おそらく、*'I died a million times.'* くらいだろう。「だぜ」は訳せない。いくらがんばっても、せいぜい *'I died a million times!'* どまりだ。残念なことに、*'I died a million times daze!'* とは訳せない。

いつも英日翻訳で苦勞している者としては、こういう英語になりづらい日本語の表現に出くわすと、とてもうれしい。そして佐野洋子の『100万回生きたねこ』は、この手の「なりづらい」言葉がじつに多いのだ。

とまあ、以下、英語にはない日本語独特の言葉について書き、さあ、英訳はどうする、無理だよな……と続けるものの、最後は「ただけど、やっぱり、この絵本、英語で読んでもおもしろいはずだぜ」「いい本というものは、英語であれ日本語であれ、そんなものだ。だからこそ翻訳なんてものが成り立つ」と締めくくっています。

まあ、そう思ってないと、翻訳なんてやってられないわけです。つまるところ、翻訳家は楽観主義者なのでしょう。

そんな楽観主義の翻訳家志望者にむけて書いたのが『翻訳エクササイズ』（2021年）です。今年その続編『翻訳ワークショップ』を出すにあたって前作を読み直してみたのですが、「エクササイズ」というわりには英語を訳してみましようという問題が少ないですね。とくに前半は、一人称のこととか、常体・敬体の話とか、いってみれば翻訳エッセイのようになっています。

というわけで、今回は「ワークショップ」というタイトルでもあり、前回よりは英文を訳す問題も増えて、少しだけ翻訳のお勉強になりました。ちょっと専門的になったといってもいいでしょう。前回が初級編としたら、今回は中級編くらいでしょうか。サマセット・モームやデ・ラ・メアの文章はそれなりに菌ごたえがあります。どうぞ、試訳を参考にしてコツをつかんでください。また「ひっくり返さないように訳す、ときには辞書の意味と逆に訳す」は、いったん慣れてしまえば、あとはパズルのようなものなので、かなり応用が利くと思います。

また、ここ数年、よく話題に上がるようになったAI翻訳についての章は若い方にぜひ読んでほしいところです。フランス文学を訳している野崎歓さんの『翻訳はおわらない』がちくま文庫になりました。その帯に大きく「AIなんか怖くない!」と書いてあるのですが、その下に小さく（ただし、当分のあいだは）と添

えられています。これからの翻訳、AIをいかに効果的に使うかを考えたほうがいいのはいうまでもありません。

たとえば、ちょうどいまニール・ゲイマン原作のコミック『サンドマン』第6巻の本文を訳し終わったところなのですが、最後の **Biographies** が残っています。このコミックの制作にかかわった原作者やイラストレーター、その他15人ほどの紹介です。大判の本で、細かい字がびっしり3ページ。これを訳すのはかなり時間がかかります。こういうときAIは便利です。書かれている内容はほとんどがその人の経歴、作品、受賞歴なので、誤訳する余裕が、いや、余地がありません。そのうえ、固有名詞などはきちんとカタカナに直してくれるので打ちこむ手間が省けます。これは大きい！ 訳者はAIの訳文をチェックすればOK。それも無料！ 使わない手はないでしょう。これなんかはごく初歩的な使い方ですが、知らないと損をする使い方でもあります。その他、いろんなふうに使えるはずです。

後半の「実践編」も、前回よりかなりレベルアップしています。前は、小学校高学年から中学生むけの短編だったのですが、今回はエンタテインメントの短編で、長いうえに、内容的にもかなり難しくなっています。もちろん、児童書は児童書なりの訳しづらさがあるのですが、英文そのものの難易度でいえば、こちらのほうがレベルが高い。

なので、ちょっと本気になって翻訳の勉強をしてみたいという方は、ぜひ、チャレンジしてみてください。

著 者

日本語を読んだだけで 誤訳とわかる誤訳 (2)

『翻訳エクササイズ』でもいろんな例をあげました。つい、うっかりやってしまう誤訳、それも訳文を注意深く読めば、原文をみないでもわかるような誤訳……あります！ ぼくも何度か、いや、何度も痛い経験をしました。つい数年前、**his prides of beasts** を誤訳して、おや、なんか変だなと思いつつ、それでもなんとか意味が通るので（ごまかせそうだったので）先に進んでしまい、訳了後、原文とつきあわせてくれた人に指摘されて、赤面しました。原文はこれです。

The Illustrated Man bent violently above the old old dead dead thing, his prides of beasts drowned deep in sweat, his right hand thrust in hammering demand upon the air: Live, live.

レイ・ブラッドベリの『何かが道をやってくる』(*Something Wicked This Way Comes*)で、刺青男が、死んだはずの男を生き返らせる場面です。そのときはたぶん、こんなふうに訳したと思います。

刺青の男が勢いよく、とことん老いて死にきった男の上に身をかがめた。彼の肌に彫りこまれた誇り高い獣たちは汗のなかに深く沈んでいる。右手がくり返し突き上げられ、命令を下した。よみがえれ、生き返れ。

「彼の肌に彫りこまれた誇り高い獣たち」は見事な誤訳で、「彼の肌に彫りこまれた獣たちの群」が正解。危ない！ この部分は、既訳、大久保康雄訳も同じような感じで、「野獣どもの誇り」となっています。

じつは、**a pride of lions** が「ライオンの群」だということはちゃんと知っていたのです。これは「間違いやすい、しかし間違えると恥ずかしい誤訳」のひとつとして有名ですから。それなのに、ここでつまづいてしまったのがくやしい。

ライオンといえば、原文は忘れたのですが、何を勘違いしたのか「雌ライオンのたてがみ」と訳したことがあって、なんと、それを編集者も見落としていて、ゲラを読んだときに気がついて、血の気が引いたこともあります。

◆To err is human! (過ちは人の常)

たとえば、先ほど例にあげた大久保訳の『何かが道をやってくる』にこんな訳があります。ふたりの少年のところに避雷針を売る男がやってきて、今夜、嵐がやって来るぞと話しかける場面です。

‘Tonight?’ Jim sat up, happily.

‘No ordinary storm!’ said the salesman. ‘Tom Fury tells you. Fury, ain’t that a fine name for one who sells lightning rods?...’

ここの **Tom Fury tells you.** 以下、大久保訳は「このトム・ファリーは嘘は言わないよ。ファリー（毛皮）なんて、避雷針を売る男にしちゃ、やさしい名前だろう？」

え、毛皮？ と思った人も少なくないはず。

Fury を Furry と読んでしまったのでしょうか。いうまでもなく、以下の試訳のようになります。

試 訳

「ただの嵐じゃない！」セールスマンが言った。

「トム・^{フュアリー}ファリーがいうんだから、間違いないぞ。怒りなんて、避雷針を売って歩く男にぴったりだろう？」

ちなみに、『何かが道をやってくる』の金原訳は小学館の「J 文学館」で読めます。また、東京創元社版は現在、新訳（中村融訳）が出ていて、こちらは原文に忠実な訳になっています。

読み間違えや勘違いは翻訳の敵……なのですが、敵は手ごわい。いったんやってしまうと、案外、抜けられません。いわゆる刷りこみというやつです。死ぬまでそのまま、ということもあるでしょう。

じつは、ブラッドベリのこの作品の原題、ほくはずっと *Something Wicked This Way Cometh* だと思っていました。この言葉は、シェイクスピアの『マクベス』の第4幕第1場で魔女が口にする有名な台詞です。ところがこの原稿を書き終えてから、

翻訳家の仲間にチェックしてもらったら、**Cometh** じゃなくて **Comes** ですという書きこみがありました。

えっ!? と思って『マクベス』の原文を調べてみたらその通りで次のようになっていました。

By the pricking of my thumbs,

Something wicked this way comes.

この親指がピクつくぞ、

こっちにくるぞ、悪ものが。（小田島雄志訳）

このエッセイを書かなかつたら、おそらくほくは **Cometh** と覚えてたまま死んだことでしょう。なんでこんな思い違いをしたのか、あれこれ考えた結果、アメリカの劇作家ユージン・オニールの晩年（1939年）の作品、『氷人來たる』（*The Iceman Cometh*）とごっちゃになっていたという結論に達しました。同じ頃に読んだような気がします。

この手の思いこみは日常生活でもよく経験します。

たとえば、「タックス・ヘイヴン」を「税金天国」と考えている人もまだいます。いうまでもなく **tax heaven** と思いこんでいるのです。これは **tax haven** なので、「租税回避地」。ただ、こういう英語をそのまま片仮名にして使う最近の風潮はよくない。**tax haven** は「租税回避地」でいいような気がしませんか。

そういえば、選挙や政治でよく出てくる「クォータ制」もわかりづらい。ほくは恥ずかしながら、「クォーター制」と思っていました。つまり、議員も会社の役員もまずは4分の1を女性にしようという制度。ところが、これは一定の割合にしようという制度のことでした。「クォータ制」は英語で **quota system**。いって

みれば、好ましいと思われる一定の割合にする制度です。じゃあ、「割当制」でいいでしょう。

話がそれてしまいましたが、思いこみは恐ろしいという例をあげたついでに、なんでもカタカナにという日本の現代の風潮に文句をつけてみました。コンピュータなんて、中国風に「電腦」のほうがずっといい。

「タックス・ヘイヴン」に似た「思いこみ」の例をもう少し。

「特集する」「取り上げる」という意味の **feature** をカタカナにして「今月号は〇〇さんをフィーチャーしています」などと表現することがありますが、この「フィーチャーする」を誤って「フューチャーする」といっている人を、テレビで時々見かけます。

ネットでも、「Yahoo リアルタイム」で「フューチャーしている」で検索すると、誤用している人が結構います。また、この間違いを正そうとしている人もいて、おもしろいです。

ひと昔まえ、「シミュレーション」が「シュミレーション」と間違って表記されたこともありました。

そうそう、思いこみといえば、これまで多くの翻訳家がずっと誤訳してきたフレーズに、**close the door behind one** があります。ほくもかなりの間ずっと、「後ろ手にドアを閉める」と訳してきました。ところがあるとき、ほくの翻訳講座を受講していた訳者に原文とのつきあわせを頼んだところ、「ちがいます!」という指摘! ネットで検索してみたら、いくつものサイトで「ちがうぞ!」と書かれていました。おそらくこう訳した人が無数にいたのでしょう。ほくも、そう思いこんでいました。どこで刷りこまれたのかは不明ですが、おそらく翻訳書でしょう。ただ、「**ドアを閉めた**」と訳せばいいようです。

じゃあ、「後ろ手にドアを閉める」は英語でなんというのか。いくつか考えられるのですが、**reach back to close the door** くらいでしょう。この場合の **reach** は「手をのばす」という意味です。

今年も大学入試の監督をしたのですが、「政治経済」と「日本史」と「英語」で出題ミスがいくつか出ました。それも常識的にミスとわかるミスばかりです。翻訳も、時間と余裕があれば、英語の堪能な人に訳文と原文のつきあわせを頼むのが最も効果的です。いや、英語がそれほど堪能でなくても、訳者の気づいていない誤訳を指摘してくれることは多々あります。とにかく他人の目を通すことが大切です。とはいえ、入試問題は 10 人以上が目を通して作成しているはずなのですが……。

前置きはこれくらいにして、では、まずウォーミングアップ。次の英文を訳してみてください。『ドリトル先生航海記』(*The Voyages of Doctor Dolittle*) の最後の章から。

At the foot of the stone steps leading from the Peacock Terrace to the Sunken Rosary, something made me pause and look back at the magnificent palace which we had built in this strange, far-off land where no white men but ourselves had ever come. Somehow I felt it in my bones that we were leaving it to-night never to return again. And I wondered what other kings and ministers would dwell in its splendid halls when we were gone. The air was hot; and everything was deadly still but for the gentle splashing of the tame flamingoes paddling in the lily-pond.

さて、訳してみましょう。「ぼく」というのは、この物語の語り手で、ドリトル先生に同行しているトミー少年です。

試訳

クジャクテラスからバラ園に続く石段の下で、ぼくはふと足を止めてふり帰った。豪華な宮殿がたっている。ぼくたちがイギリスから遠く離れたこの地にたてた宮殿だ。白人でここにやってきたのはぼくたちだけ。どういうわけか、ぼくにははっきりわかっていた。今夜ここを出発したらもう二度ともどってくることはない。この先、どんな王さまや大臣が、ぼくたちがいなくなったあとのこの素晴らしい宮殿で暮らすんだろう。あたりは暑く、すべてが死んだように動かない。ただ、ユリの池で飼われているフラミンゴのたてる水音がやわらかくきこえるだけだ。

読みやすい文章で、訳すのもそれほど苦勞するところはないと思いますが、この訳文、1箇所、変です。わかりましたか。

6行目の **to-night** は誤植ではなく、**tonight** の古いつづりです。

最後の **lily-pond** の訳語、「ユリの池」です。ユリは山や野原のもので、池には生えません。『ランダムハウス英和大辞典』に、**lily** は「ユリに似た植物の総称(中略)スイレン科の **water lily** など」とあります。ここは「スイレンの池」でしょう。誤訳する人は少ないような気がするのですが、井伏鱒二の初訳以降、この **lily** を「ユリ」としている訳書が案外あります。

『ドーナツのあなのはなし』(*The Hole Story of the Doughnut*) という絵本を訳したことがあります。この本によると、19世紀頃、アメリカ船の乗組員の朝食は、ほとんどいつもコーヒーと「パン生地を丸めてラードで揚げたもの」だったのですが、これが不味

い。それも当然で、まん中のほうは火が通ってないのですから。19世紀中頃、コックの助手をしていたハンソン・グレゴリーが、パン生地を丸めてまん中に、缶のふたで穴を開けて揚げる方法を思いつき、これが大好評。ハンソンのお母さんがこれを港で売り出して評判になったという話。

この食べ物をなぜ **doughnut** と呼ぶかという、諸説あるものの、このお菓子の原型はオランダにあって、それは生地にナッツを混ぜて揚げたからというのが通説のようです。

さて、次の英文を訳してみましょう。**dough** の訳に注意。

- After working all week, I finally earned some dough.
(一週間働いて、なんとかパン生地を稼ぐことができた。)
- I need to make some dough this weekend.
(週末には、パン生地を作らないと。)

なんとなく、変ですね。この2文の **dough** はパン生地ではなく、「お金、現金」という意味です。したがって、

- (一週間働いて、やっとなにがしかの金を稼ぐことができた)
- (週末までには、金を作らないと)

となります。

そこでもうひとつ。ラジオからこんな英語が流れてきました。どう訳します？

- シー・ニーズ・ドウ・エヴリデイ。

ひっくり返さないように訳す、 ときには辞書の意味と逆に訳す

BuzzFeed というデジタルメディアが出している *BuzzFeed Daily Newsletter* からの引用です。訳してみてください。

“Everything Is Better”: This Woman Left Her Job As A Teacher To Work At Costco, And It Has Started A Conversation About What Working As An Educator Is Like Right Now

A former teacher went viral after sharing how she felt leaving the education field, and it may not be what you expect to hear. (Posted on Jan 24, 2023)

viral は「ウイルスの」とか「ウイルスによる」という意味で、コロナが流行した頃はほぼ毎日、新聞でお目にかかったものですが、**go viral** は「とくに SNS など爆発的に拡散する、バズる」という意味です。

それから、**Costco** はアメリカの会員制の倉庫型スーパーで、いまでは日本にもあります。

これは **Maggie Perkins** さんが教職をやめてよかったと TikTok

にコメントを載せたら、そうだそうだという声が続々とあがって、現代アメリカの教育事情を浮き彫りにしたという内容です。労働時間が長い、給与が低い、精神的なプレッシャーが半端ないといった、日本と似た状況がうかがえます。

なぜこれを引用したかという点、**This Woman Left Her Job As A Teacher To Work At Costco** を考えてみてほしかったからです。

DeepL は「この女性はコストコで働くために教師を辞めた」、ChatGPT は「この女性は教師の仕事を辞めてコストコで働くことにし……」。いうまでもなく、後者が正解です。「AI 翻訳の可能性と限界」の章で、**to** 不定詞の副詞的用法は 2 通りに訳せるので、文脈にそって訳を考えましようと言ったのですが(29 ページ)、その好例です。

さて、次はこのマギー・パーキンズさんを取り上げた *TIME* の記事からの引用です。

Maggie Perkins had been working as a teacher in Georgia for nearly five years before she decided to ‘quiet quit’ her job. (September 12/19 2022)

注意してほしいのは **before**。「それまでの仕事を『辞める』と決意するまえ、ほぼ 5 年間教師として働いていた」と訳してはいけない例です。いままでの流れからもわかったと思いますが、「ほぼ 5 年間教師として働いてきて、『おとなしく辞める』ことを決意した」と訳します。

もうひとつ、**CNBC (Consumer News and Business Channel)** の **Make It** から。

31-year-old teacher quit her job. Now she works at Costco — and boosted her income by 50%: ‘I’ve never been happier’

これをみれば、*TIME* の記事の **before** は、**and then** というふうな意味なのだということがわかるでしょう。ということは、**before** を「そして、そのうち、やがて」と訳すこともあるわけですが、**before** も同じです。

until は必ずしも「～するまで」ではなく、**before** は必ずしも「～のまえ」ではありません。時と場合によっては、「そして～する」、「～のあと」と訳したほうがいいのか、そう訳さなくてはならないのです。辞書に載っている意味とは逆に訳すわけです。

以上、接続詞について書いてみたので、次はほかの品詞についても考えてみましょう。

今度はイギリスの作家、ジョージ・オーウェルの『動物農場』(*Animal Farm*) から。**Major** というのはでっかい豚で、この農場の長老的な存在。メイジャーが奇妙な夢をみたというので、その話をききに、農場の動物たちが大きな納屋にやってくるところです。ちょっと訳してみてください。

At one end of the big barn, on a sort of raised platform, Major was already ensconced on his bed of straw, under a lantern which hung from a beam. He was twelve years old and had lately grown rather stout, but he was still a majestic-looking pig, with a wise and benevolent

appearance in spite of the fact that his tusches had never been cut. Before long the other animals began to arrive and make themselves comfortable after their different fashions.

2 行目の **was ensconced** は、どっしりと、貫禄たっぷりに座っている状態。

5 行目の **benevolent** は「やさしい」。

6 行目の **tushes** は「犬歯、牙」。

訳すとすると、まずはこんな感じでしょうか。

試訳

大きな納屋の奥にある少し高くなったところで、メイジャーはすでに、上の梁からぶらさがっているランタンの下にある寝ワラのベッドにおさまっている。メイジャーは十二歳で、最近はかなり太ってきたが、まだ立派にみえる。牙は一度も切られたことがなく、のびっばなしだが、賢そうでやさしい顔立ちだ。すぐにほかの動物がやってきて、それぞれ好きな格好でくつろいだ。

この訳文でひとつ気になるのが、「上の梁からぶらさがっているランタンの下にある寝ワラのベッドにおさまっている」です。原文は、**Major was already ensconced on his bed of straw, under a lantern which hung from a beam.** 情景を想像しながら、英語の順番に訳すと、「メイジャーはすでに寝ワラのベッドにおさまっていた」「梁からぶらさがったランタンの下に」となります。そして、**A under B** は、**B** の下に **A** があるという位置関係を示しているだけで、発想を変えれば、**A** の上に **B** があるという意味にも